

親 鯉 候 補 養 成 事 業

八木久則・目片徳治

I 目 的

親鯉の生産にはその基となる採卵用優良親鯉の確保が特に必要であるので純良系統の親鯉の自給を計るため前年生産の放流用鯉苗中より形質優良なものを選別、種苗とし、構内大型養成池において親候補鯉の養成を実施した。

II 事業実施期間及び養成池

期 間 昭和34年12月以降継続実施
 使用池 旧1号池 面積 11,550m²

III 経過及び結果

1 種苗の放養

本年度総生産目標量を2,000kgとし、その内の1割200kg(約350尾)を親候補鯉として確保するため、前年生産の放流鯉苗中から形質優良なもの450kg(15,000尾)を選別し養成池に放養した。他に保有親鯉の内で未熟魚を選別し再飼育のため放養した。又、本養成池は夏期水草類の繁茂が著しく飼育魚の成育に悪影響を及ぼすので、これが駆除のため水草を好餌とする草魚を混養した。(放養状況は表1)

表 1 候補用鯉苗等の放養状況

養成池	面積	種類	放養月日	放 養 量		平均体重	尾数 尾	備 考
				重量 kg	尾数 尾			
旧1号池	11,550 m ²	鯉 苗	34.Ⅷ.7 ~Ⅷ.10	456	15,100	30 ^g	1.3 ^尾	放流鯉苗中より選別
"	"	未熟親魚	"	399	332	1,200	0.03	親鯉中から選別再飼育
"	"	草 魚	"	44	628	7	0.05	埼玉県より購入
計	11,550	-	-	859.4	16,060	-	-	-

2 飼育経過

イ 給餌状況

4月上旬より投餌を開始し、11月中旬まで継続給与した。又、池水豊度の上昇とプランクトンの発生を促進するため期間中、醬油粕を適宜施肥した。

表 2 給 与 餌 料

種 別	蚕 蛹	碎 麦	仕 上 糠	紗	大洋フード	計
給餌量 (kg)	2,827	1,306	530	350	714	5,727
同上組成 (%)	49.4	22.8	9.3	6.1	12.4	100

表 3 施 肥 状 況

種 別	数 量	池 面 積	m ² 当り施肥量	備 考
醬 油 粕	kg 1,710	m ² 11,550	g 147	期間中 3回に分け施肥

ロ 斃死状況

飼育魚の成育状況は順調であったが、7月25日～26日の両日早朝時に飼育魚が“鼻上げ”の状態となり一部が斃死した。この原因としては斃死事故発生前数日来、日中の最高気温は33～34℃の高気温が続き、従って池水温も日中は30℃以上に上昇した。更に、早朝時風がなく比較的蒸し暑い天候が続いたことと、池水中の植物性プランクトンが過量発生状態にあつた等のため朝方、水中酸素の欠乏したものと考えられる。

事故発生前より、これが予防措置として、注水により池水の交換を実施するとともに給餌量の調節を行なつて来たことと、事故発生と同時に大量注水と餌止めを行なつたので被害を一部に止められたことは不幸中の幸いといえよう。

表 4 斃 死 状 況

種 別	斃 死 数		平均体重	斃死魚外観	斃死魚の解剖所見	摘 要
	数量	尾数				
鯉	kg 170	尾 476	g 356	外傷等別に異常なし	内臓各器官に異常なし	斃死魚は腐敗の徴候がみられたので遺棄処分した。
草 魚	11	26	423	,	,	,

3 取揚成績

飼育魚は8月13日に中間取揚げを行い、11月21日～26日に総取揚げを実施した。その成績は表5のとおりである。即ち、取揚げ総量では3,340kgで、この内鯉は2,850kgであった。飼育途中斃死事故はあつたが成育状況は全般的に良好であつたので目標量2,000kgを約40%上廻る好結果を得た。

表 5 取 揚 成 績

養成池面積	11,550m ²	取揚総量	*3,340kg
種苗放養数量	859.4kg	m ² 当り生産量	280kg
種苗放養尾数	16,059尾	増肉量	2,480.6kg
親苗放養期間	35.Ⅷ.8~9	増肉係数	2.3
取揚げ期間	第1回,35.Ⅷ.13 第2回,35.Ⅺ.21~26		

* 鯉2,850kg,草魚140kg,鮒その他350kg

4 候補鯉の選別淘汰

鯉取揚総量2,850kgの内、次代の親鯉候補用として形質、生育優良なるもの225kg(300尾)を選別し、親鯉専用池に移し現在継続飼育実施中である。残魚は淘汰魚として払下げた。なお、草魚は全部継続飼育中で次年度、さらに水草駆除の目的で混養する予定である。

Ⅳ 要 約

- 1) 優良親鯉の自給を計るため前年生産放流鯉苗中より形質純良なるものを選別し、これを種苗として構内大型養成池において親候補鯉の養成事業を実施した。
- 2) 取揚総量は3,340kg(草魚,鮒を含む)で、この内鯉は2,840kgであった。候補鯉は2,840kgの内から225kg(300尾)を選別し、親鯉専用池に移して引続き養成中である。
- 3) 7月下旬、飼育魚の内、鯉170kg(476尾)草魚11kg(26尾)が斃死した。原因は水温の異常上昇と植物性プランクトンの異状発生による早朝時の水中酸素欠乏によるものと考えられるが、大量注水による池水の交換等の応急措置が効を奏し、被害は比較的少なかった。